7月増刊号 会報

有田史談会
事務局
佐賀県西松浦郡有田町上幸平 1-8-5
TEL　090-4740-4752
HP　arita-sidankai.sub.jp/
arita-sidankai@hotmail.com

大橋先生の特別講座について

今年こそはと期待していた大橋先生の特別講座は、コロナウイルスの影響で実施にはまだまだ時間がかかりそうです。しかし、史談会会員のワクチン接種が順調に進んでおり、九月ころから例会も開催出来そうな雰囲気になってきました。全員のワクチン接種が終了し、皆様と笑顔で再会したいものです。

実は先日、大橋先生へご機嫌伺いを兼ねて講座開催のお願いのお手紙をお送りしました。投函の二日後、早速メールが届き「コロナがある程度収まっていることが条件ですが、十二月から来年一月頃に考えたい」との嬉しいお返事を頂きました。

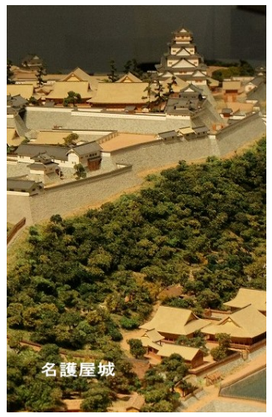
史談会のメンバー全員が楽しみにしている大橋先生の特別講座が本年度中に実現出来る可能性が大きくなりました。先生のご予定が立てばと言うことにはなりますが、希望が叶うかも知れません。

大橋先生へは、九月頃に再度メールをお送りしてご予定を伺うことにしています。これまでは四回の特別講座でしたが、たとえ一日でも特別講座が実現できると幸甚です。楽しみにお待ち下さい。

2018年9月「やきものの見方」九陶研修室にて

話は変わりますが、九州陶磁文化館の家田副館長は三月で退任され、この四月から名護屋城博物館の館長として赴任されています。これを機に中断していた「名護屋城址&陣跡巡り」を本年度中の町外研修の検討課題として、再度計画したいと考えています。

来年二月二十日には、家田館長による「国交回復以後の日朝陶磁器交流」と題しての歴史講座が開催されますので、これに合わせてスケジュールを組むことも検討したいと思います。



コロナに負けるな！

町内では五月よりコロナワクチンの接種がようやく開始され、年内には落ち着きを取り戻せる明るい兆しも見えてきました。しかし、来年以降もコロナウイルスが消えるわけでなく、新しい情報に耳を傾けながら、コロナウイルスと向き合い感染防止を継続する生活スタイルが定着していくことになりそうです。

我が史談会のメンバーも順調にワクチン接種が進み、七月末頃には全員が接種を終える見込みです。

ワクチン接種のリスクが取り沙汰されていますが、感染して重篤化した場合のリスクの方がより深刻です。ワクチン接種は任意なので躊躇う人もありますが、自分自身が感染しない、家族や周囲の方々に感染させないためにも接種したいものです。

LINEやってますか？

有田史談会のグループLINEへご参加下さい！

史談会メンバーのスマホ利用者はこのところ随分増えてきましたがLINEへの参加者が中々増えません。

事務局ではパソコンでLINEを利用中ですが、手軽にデータの送受信が行え、便利に使っています。

コロナ禍でリモートによる会議は今や当たり前で、時代に乗り遅れないよう史談会の皆様もご参加下さい！

なお、LINEの使い方がイマイチ理解できない方は事務局にてご指導しますのでお気軽に立ち寄り下さい。

有田史談会 (5)

※グループで行うLINEは上記の表記です。
ちなみに現在は5名が参加しています。

有田の六地蔵

栗山愼悟

地蔵は地蔵菩薩の略で、「お地蔵さん」「お地蔵さま」と呼ばれ、人々に最も親しまれている信仰仏である。日本に地蔵信仰が伝来したのは奈良時代で、平安後期には武士や庶民の間にも普及していった。

地蔵菩薩は釋迦入滅後から弥勒菩薩が誕生するまでの間、衆生を強化済度する菩薩である。六地蔵とは、衆生が前世の業によりおもむく六種の迷いの世界、すなわち「地獄」「餓鬼」「畜生」「修羅」「人間」「天上」をいい、六地蔵は六道において衆生の苦悩を救済する六種の地蔵をいう。

「地獄道」　六道の最下層。生前に悪業をなした者が、閻魔大王の裁きにより罰を受ける世界。地獄の鬼によって過酷な刑罰が加えられる。

「餓鬼道」　食べ物・飲み物を自由に食することができず、常に飢えと渇きに苦しむ世界。

「畜生道」　地獄・餓鬼より上だが畜生に生まれ変わって苦しむ世界。

「修羅道」　阿修羅の略。怒りと争いの絶えない世界。阿修羅は争いを好み善神に戦いを挑む悪神。

「人間道」　人間の住む世界。

「天上道」　六道の最上部にある世界とされるが、輪廻から免れない。

有田町の六地蔵は、旧有田町に十六ヵ所、旧西有田町に七か所の二十三ヵ所に祀られている。

有田町の六地蔵の所在地

お寺（旧有田町）桂雲寺境内。報恩寺門前。善福院門前の三ヵ所。

（旧西有田町）無い。

墓地（旧有田町）泉山。中樽。大樽三空庵広場。白川。岩谷川内公民館。大野。南川良。応法。黒牟田。古木場ダム下。外尾山岩崎踏切付近。外尾山交差点付近。三代橋区民センター付近の十三ヵ所。

※白川墓地の地蔵は、七体の石仏の中に地獄道だけが祀られている。

（旧西有田町）二ノ瀬公民館付近。蔵宿バス停付近。MR黒川駅前。原明。MR山谷駅前の五ヵ所。

中樽墓地の六地蔵

外尾山交差点付近の墓地の六地蔵

四角い石の正面に六体の地蔵が彫られている。

古木場ダム下の六地蔵

一つの石に六体の地蔵を彫ってあるのは旧有田町では、古木場ダム下と外尾山交差点地付近の二ヵ所。

神社（旧有田町）無い。（旧西有田町）　曲川八阪神社。下内野天満宮の二ヵ所。

一つの石に六体の地蔵を彫ってあるのは（旧有田町）古木場ダム下の墓地。外尾山交差点付近の墓地の二ヵ所。（旧西有田町）二ノ瀬公民館付近の墓地。MR山谷駅付近の墓地。曲川八阪神社。下内野天満宮の四ヵ所。他の十七ヵ所には六体の地蔵が祀られている。

継続は力なり

中村貞光

十年日記を書き始めて六年半が過ぎた。これまで何をするにも長続きしたためしがなく、十年日記も三日坊主で終わるだろうと思いながら始めたが、意外にも続いていることに我ながら驚いている。

六年前、日記帳を購入しようとWEBサイトで探してみたが、B5サイズやA5サイズの日記帳までは市販されているがA4サイズの日記帳が見当たらない。

歳のせいか、最近では小さいサイズでは文字が書きずらく、それならば自分に合った書き易い日記帳を作れば良いのだと、オリジナルの日記帳を作ることを思い立ち、一年分365ページ分を作ることになった。

市販の日記帳を参考にして、取り敢えず一ページに十年分の書き込み

オリジナルの10年日記帳

が出来るファイルが出来上がり、自宅のプリンターで印刷した。

出来上がった全三六五枚のファイルはA4サイズ用の三十穴ゲージパンチで穴を開け、ダイソーで購入した厚めのカバーに一月から六月までの前期分と七月から十二月までの後期分の2冊に何とか収まり、オリジナルの日記帳が完成した。一日二～三行程度の日記を書くだけなのだが、現在も辛うじて継続している。

継続していることと言えば、体重測定もその一つだ。毎日入浴前に測定し記録するが、些細なことでも健康管理では欠かせない。記録をとるだけで体重が維持できるのだから、こんなに簡単な健康法はない。毎日測定し記録する行為が頭にインプットされ、体重維持に役立つのだ。

体重測定するだけでは効果が半減するが、記録することで効果が上がると思われる。この行為が食事にも良い効果をもたらすと考えられる。糖質制限も無理なく自然に出来るようになり、美味しいものを食べれない辛い食事制限は必要なくなるので多くの人に実践をお勧めしたい。

ウォーキングは家内の病気を契機に二十年以上継続している。自慢出来ることでもないが、五十歳以前は殆ど運動らしきものはやったことがなかったから、歩くだけで健康に活かせるのは一番簡単な健康法なので実践している。

天気の良い日は必ず歩くように心がけている。出来るだけ起伏のあるコースを歩く方が筋力作りに効果があるので、自宅から近い有田ダムへのコースが多い。約一～一時間半のウォーキングを楽しんでいる。

何事も継続するのは難しいものだが、「継続は力なり」で、続けることに意味がある。淡々と続けていると自ずから結果が付いてくるのだ。元来飽きっぽい性格の私にも出来ているので、自分自身も驚いている。皆様もチャレンジしてみてはいかがだろうか。

昔話「おいの知っとっとだけ！」

鶴　一樹

黒牟田のことはクロンタて言いよりました。五才から二十歳までクロンタで育ち、二十歳から三十歳までは外尾町へ移り、三十歳から現在までは岩谷川内に住んどっと。やっぱ、子供の時の思い出が強烈か！

そいは夏祭り。八月一日が「ぎおんさん」ちゅうて、おかさん（母）が、まんじゅうば五～六軒分作りよらした。一軒分に、やっぱ十五個位は、はいっとった。そいば配るのがおいの仕事やった。覚えとっとが外尾山の貞陸（製陶）クロンタの梶貞。夕方になっぎ、おのおのてんでにゴザば、やくさん（山辺田窯跡の横の神社）の広っぱに家族分すいて時代もんのよそから来らした劇団の芝居ば見よった。見せ場で一つ覚えとっとがヤクザなチョンマゲの人が子分の膝の上に片足乗せて、刀を見上げて見得を切るところ。たぶん国定忠治だったやろか。

※「やくさん」は陶山神社で薬師観音堂も祀られていた。

そして、八月二十三日頃、地蔵さんの祭りがあったたい。こいは、子供ば喜ばすっ祭りで、三角の紙に大豆ば炒って黒砂糖ばからめて量は少なかったどん、目ば白黒すっごとうまかった。十円、地蔵さんに上ぐっぎくいらした。夜は豪華賞品の当るクジ引き大会。昼に、五十円か百円か二百円ば各家で出して、券ば買うておいて、夜ウチワをパタパタあおぎながら公民館広場に。

あの頃、クロンタの人口はどんくらいやったか、押すな押すなと人が集まって、一つ番号ば大声で発表さすと、当ったもんが出てきて商品ばもろうていくったい。五等ぐらいやったろうか粉ハミガキは。一番下が五円ぐらいのマッチ。四等ぐらいが樟脳、ナフタリンやった。フライパンとかテーブル。そして、一等賞が五段ぐらいのタンス。おおいに盛り上って終わいよったバイ。ウチが当ったとは歯ミガキ粉やった。よう覚えとらん。こいが夏祭りの締め、終わり。イナカの方の夏祭りたい。

小学生頃は外尾山の夏祭りの劇ば必ず見に行きよった。ここも後年は映画になったどん、有田の夏のぎおんでは一番人気があったとさい。

中学になって初めて上のもんと同じクラスになって、あとで八坂神社、陶山神社の夏祭りにびっくいした。人出の多さと、なんか本格的まつりやー！思うたことやった。中学になって初めて上（カミのもん）の存在ば知ったとさい。昔は上のもんが上で、下のもんはじゃあごもんて言う人もおったごと上の人たちは金持ちバイねと思いよった。

※七十歳になったので、昔を思い出しながら、書いてみたとばってん、自分でも懐かしか思い出です。みなさんもあの頃は懐かしかろ？

懐かしい昭和時代の紙芝居風景

神社巡り

井手邦男

二〇一九年末からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により国内では3蜜を避けた行動が求められるようになり、私は人混みを避けて出掛ける場所として神社巡りを始めました。

まずは自分が住んでいる伊万里から始まり、有田や唐津方面へと範囲を拡大して見て回りました。神社を見い出すポイントとして、鎮守の森と言われている特徴的なフォルムを呈している木々が目につき、その地の神社に行き当たるといった感じで参拝しています。多くの神社を参拝しましたが、その中でも気になる二ヵ所の神社に関して紹介します。

伊万里市牧島区にある志賀神社

ひとつは伊万里市牧島区にある志賀神社です。

この神社は鍋島公が塩を初めて造らせた所です。当時佐賀藩は良質の塩が出来ず、筑前黒田長政公に製塩技法の指導を求めました。一六〇八年（慶長十四年）製塩技術者及び関係者が姪の浜よりこの地に移住し、塩田つくりに着手しました。成富兵庫重康（鍋島の重臣）の指導で塩田を完成させ、一六一四年（慶長十九年）より製塩を始めることにあたり、郷土姪の浜の守り神である志賀神社を招聘し、塩業の発展と子孫繁栄を願い建立されました。

慶長十九年（一六一四年）建立

祭神　主神：綿津見神　塩と水の神様

副神：鍋島勝茂（泰盛院）

初代藩主で塩業の開発と庇護成富兵庫重康：武田信玄、加藤清正と並び称される治水の天才

※鍋島勝茂・成富兵庫重康は年代は分かりませんが後から祭られた

※『牧島地区まちつくり運営協議会』の写し抜粋

神社裏手の扉に杏葉の紋が

この神社は一六一四年に鎮座した石碑がある古い神社です。塩を献上した三五〇年祭の記念碑が建てられています。その他灯篭の上に逆立ちをして乗った狛犬があります。その狛犬の腹部には牡丹が刻まれていて見事なものでした。また神社の裏手には杏葉の紋が左右の扉につけてあります。扉の前には肥前狛犬が一対置かれています。非常に珍しい狛犬です。神社の門の入り口には肥前鳥居に似た鳥居があります。門をくぐった左手には鍋島の杏葉の紋がついた手水鉢があります。境内は広くはありませんが、たくさんの歴史が残された神社です。私はこの神社で塩が作られたことを初めて知りました。

二ヵ所目は伊万里市山代町長浜にある日峯(ひのみね)神社です。

この神社も製塩を手掛けていた神社でした。

藩祖鍋島直茂公は領内に食塩の乏しさを憂いて、その自給を企て山代郷奥浦の住人中尾六左工門に塩田開発を命じ、一六〇六年（慶長十三年）藩主は黒田長政に請って筑前姪浜より、塩業者武藤九郎兵衛、志田孫兵衛等を招き、一六一四年（慶長十九年）製塩を始めた。筑前姪浜より製塩のの守護神である住吉神社の分霊を勧請して浮島（うけじま）に志賀神社を建てさせて祭料を付し、又薪料として奥浦山を与え製塩運搬の無判船を許して保護奨励を加えた。

毎年正月四日、恒例として初塩献上の儀を行い、その後氏子によって藩祖の偉業を不朽に祈念するため、一九〇七年（明治四十年）十月十五日藩祖直茂公の霊を合祀し志賀神社を『日峯神社』と尊称、以後氏子の崇敬の念益々深く同時に猿田彦命外一柱を合祀し祭神とした。

※『東山代町まちづくり協議会』の写し抜粋

この神社も全く知らずに行き当たった神社でした。この神社について地元の方に話を聞いたところ、塩を作るときに出る**にがり**が有田の焼物に深く関わりをもっていて、にがりのおかげで焼物の生産が早く出来るようになったとのこと。

私は焼物を作る際に昔から**にがり**を使っていたことをハッと思い出しました。しかし、にがりをどこで購入していたかまでは分かっていませんでした。

皆さんは焼物を作る工程のどこでにがりを使うかご存じでしょうか？

日峯神社入り口の鳥居

鍋島の謎に満ちたハート繋文

鶴美百合

ついに、謎に満ち満ちた鍋島のハート♥つなぎ文と遭遇してきました。いまだ興奮が冷め止まりません。展示してあるのは、伊万里駅の二階にある「伊万里・鍋島ギャラリー」です。

ここは工藤博士のコレクションが集められた、鍋島の優品揃いで驚くばかりの作品を目の前で（といっても分厚くて厳重なガラス越しで、めざすハートはよく見れませんでした）まっ、しかし、このように身近に感じることができて、やっぱい、有田に住んで良かった！と思った瞬間でした。

展示されていた鍋島の正式な作品名は、「青磁染付桜文皿」口径：15.3㎝、高さ：3.5㎝、底径：8.0㎝　そして、器形は扁平と、個性があります。

また、このような美しい作品の高台に、ハートつなぎ文が付いているというのをいままでとんと知る由もありませんでした。もし、知っていたら、もう、すっ飛んで会いにいったでしょう。それで、ひょとして私だけが知らないのではと思い、やきもんのエキスパートの史談会の仲間にそのお皿を尋ねてもだれも知らないというのです。もう、この時点で謎です。なぜこの長い間、初期鍋島（1560～70）のハートつなぎ文が皆に知られていなかったのか？

さてその一枚のみのお皿は、小さか取って皿という感じでした。にもかかわらず、みてのとおり、あわい青磁を流水にみたて、二列の桜がまるで水面を流れているような詩情あふれる小皿でした。これを観ても、

このハートつなぎ文のある高台のお皿の初期の鍋島（1560～70）の時期が、鍋島がいちばん生命力に満ちて輝いていたのだ！と私は勝手に感じています。その作風の意匠を見る限り、いっちゃん（とても）みんなが暖かくハートフルの時代だったのでは？　そこにはキリシタン陶工のみなさんがいきいきと創造意欲と自由を謳歌していたのが目に浮かぶようです。それに、この時期には色絵もはじまり、なんと、もったいない顔料を塗りつぶしている九谷青手風のお皿あり、茶陶風の向付あり、シェイプも様々、お花の淵のようにふりふりあり、木の葉や植物の型あり、その意匠は思いもかけぬ大胆でデザインは斬新！まるで現代にあっても全然古いとかんじさせない！これは、もう、やきものルネッサンス磁器（時）といってもいいくらいの画期的なやきものぞろいです。

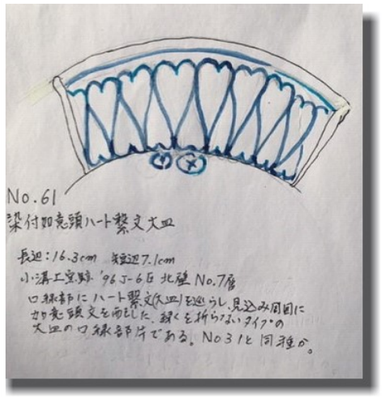
しかしながら、残念なことに、このようなルネッサンス初期鍋島は以外と短くて知られていません。ハートつなぎ文は猪の目（いのめ）といわれ、江戸時代にハート？そんな点で終わってしまっていたようです。それもそのはず、一般的に、ハートというだけでみなさんが思いつくのは、バレンタイン・ディのチョコレートではないですか？　まずもって、異国趣味に聞こえてしまいます。

そうのような、異国趣味の影響は初期の有田・伊万里、肥前の窯業圏には存在しないと思われていたからではないでしょうか？　そもそも、焼き物の技術革新のもとになったのは中国の景徳鎮をめざしたとされていますので、「そのような時期に異国情緒あふれるハートなんぞまかにならぬ！」「ええ～い！そのようなもの、いますぐ切り捨てよ！」と、いうお殿様がいたように妄想しています。それに、私がイメージしていた鍋島も、徳川将軍様に献上するきわめて上品な作品。しかも製作時期江戸の一時期で稀少価値があり、世界でも高い骨董的価値を認められている作品だと。

一方、そういう一般庶民と関係ない焼き物という高級作品というイメージとはうらはらに、それを制作している鍋島藩窯の陶工さん達。三方を山に囲まれ閉ざされた伊万里の大川内にある藩窯に、一生厳重に閉じ込められて、中にはそこから逃亡した伝説が残されている副島勇吉（キリシタン陶工と勝手に推測）は、さらし首という悲惨な面も垣間見ることができるのでした。

が、今回、この暖かいハートのつなぎ文を知ることができ、がぜん奮起いたしました！　いや、ずっと、ほんなごと、有田にキリシタン陶工さんはおらしたとやろか？と、くじけ、投げやりになっていました。

しかし、今回、私にこのハートコール暗号がささやいたのです。「あなたに、このハートつなぎ文のプレゼントをします」と、私はいまやっと、ハートつなぎにめぐり会い、キリシタン陶工がいたのだと確信いたしました。



さて、最後に、このハートつなぎは、九陶の柴田コレクションで見ることができます。（しのぎの茶陶風のカップの口に帯状に廻らせてありました）また、村上先生の最近出版された、伊万里磁器の創始窯　小溝上出土陶片にも、それから山辺田の発掘のお皿の見込みには変わった獅子皿の淵にも、それから遠くはなれた石川県の色絵九谷のお皿の淵にハートつなぎ文が色付きで施されているのを見ました。また、九谷の皿で有名な、「色絵鶴かるた文平鉢」（聖水盤か？）　十文字型をしたスペードの中にハートが散りばめられています。さようにに、ハートつなぎ文にはいろいろなハートのつながりがあるように感じられます。

それでは、今後とも、史談会の皆様ハート♥つながりでよろしくお願いいたします。

古物の誘惑　パートⅣ

山口信行

明治時代以降の焼物は、云わゆる”超絶技巧”と言われるように、緻密に描かれ作りも丁寧に出来たものがある。凄い技術だナと思うが、あくまで個人的にはそれほど好まない。江戸初期の、生掛けの生地に描かれた伸びやかな染付の絵文様、その後に来る、呉須が冴えて同じく伸びやかな描写で薄造りの寛文様式の文様。さらにそれから、いかにも日本的な余白を生かした優美な延宝期の描写の絵柄などは、最も自分を惹きつける染付の作品類である。

色絵では、かつて古九谷様式と呼ばれていた初期の色絵の古伊万里。そして柿右衛門様式から享保期ぐらい迄が心惹かれる。そのようにして好みのものを集めたりしていったものだが、何といっても時代が分からないものもあるわけで、そんな時にずいぶんお世話になったのが、九陶の学芸の先生方である。通常業務でご多忙の中に、連絡してからではあったが、陶磁器を持ち込んで数多く時代判定をして戴いた。熱心のあまり、ここでは述べれないほどのご迷惑をおかけしたこともあり、今思えば非常に心苦しい思い出もあり恥ずかしい。集めたものも、時がたつと飽きるものである。或いは金が必要で背に腹はかえられず手放すこともある。以前はよく骨董市に並べたりもしていたが、最近はネット販売もありモノは動いていく。

以前から気づいているのだが、古いものには秘められたパワーを感じる。たとえば、手中におさまる傷だらけの金直しがある古唐津の小皿がここにあるとしよう。それを私は両手のひらに挟め、愛しく撫でまわす。すると、不思議とその手のひらから力が湧き上がって来るのである。もちろん、私の思い入れから来る主観に違いないだろう。しかし、人生たかだか数十年、けれどもこの皿は、約四百年の月日を経て今まさにここにあるのである。おそらく近いうちにその皿を私は手放すことになるだろう。その行先は同じくそれを望む人かも知れない。或いはどこかの資料館、美術館かも知れない。いずれにしても、私が割って遺棄しない限り、これからも私より永く残っていくはずである。そのように考えたとき、私はその小皿を購入し今所有しているが、私は云わば一時的な所有者に過ぎない。小皿にとってみれば、一時的な仮の宿に、たまたま私の所をかりているだけのことである。割ったり紛失されない限り、これからも永くこの世に残っていくに相違ない。古物を購入したときに、「頂きます」という代わりに、「お預かりします」と云ったりするのは、そこから来ているのであろう。たかが古物、されど古物である。

レオナルド・ダ・ヴィンチ特集のTVを見ていたら、彼の残したという次の言葉が不思議と心に残った。

『人は時があまりに早く過ぎ去ることを嘆くがそれは違う。時は十分すぎる時間をかけて移ろうことを知るべきである。我々は天から授かった力によって遠い記憶を眼の前に感じることが出来るのだから。』

二つの青春

坂井勝也

毎日午前４時頃に目が覚め、新聞を取りに行きお悔み欄から読み始めます。齢八十歳に近くなり、次は自分の番かなと思うようになりました。最近は落ち込むことが多く、自分を勇気づける「杖言葉」を、さがしておりましたら、二つの「青春」に出会いました。

松下幸之助の「青春」とサムエル・ウルマンの「青春」です。

最初に松下幸之助の「青春」を紹介します。

青　春

松下幸之助

青春とは心の若さである。
信念と希望にあふれ、勇気に
みちて日に新たな活動を
つづけるかぎり、青春は永遠に
その人のものである。

これは、私が週一回は必ず過ごすことにしている京都・真々庵の、いつでも目につく壁にはってある“青春”をテーマにしたことばです。私は、この真々庵にいる時は、一日に何回となく、この言葉を読み返し、味わい返しています。（若さに贈る講談社現代新書）

次に、サムエル・ウルマンの「青春」を紹介します。これは、電力の鬼、松永安左エ門の訳した「青春」です。

これは、昭和２３年電気事業再編成審議会委員長就任後、松永が連合軍司令部を訪問したとき、マッカーサー指令官の執務室にサムエル・ウルマンの詩「YUOTH」が額に入って掲げてあった。松永は感激してこの詩を所望し、自ら翻訳したものです。

青　春

サムエル・ウルマン
（松永安左エ門訳）

青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。逞しき意志、優れた想像力、炎ゆる情熱；怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。

年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。苦悶や狐疑や、不安、恐怖、失望、こう言うものこそ恰も長年月の如く人を老いさせ、精気ある 魂 をも芥に帰せしめてしまう。

年は七十であろうと、十六であろうと、その胸中に抱き得るものは何か。

曰く、驚異への愛慕心、空にきらめく星辰、その輝きにも似たる事物や思想に対する欽仰、事に処する剛毅な挑戦、小児の如く求めて止まぬ探求心、人生への歓喜と興味。

人は信念と共に若く　疑惑と共に老ゆる。

人は自信と共に若く　恐怖と共に老ゆる。

希望ある限り若く　失望と共に老い朽ちる。

大地より、神より、人より、美と喜悦、勇気と壮大、そして偉力の霊感を受ける限り、人の若さは失われない。

これらの霊感が絶え、悲嘆の白雪が人の心の奥までも蔽いつくし、皮肉の厚氷がこれを固くとざすに至れば、この時にこそ人は全くに老いて、神の憐れみを乞う他はなくなる。

私は、この二つの「青春」を杖言葉として残りの人生を歩んでいきたいと思っています。

カラトサン

前田順三

赤絵町の今泉今右衛門家と今右衛門古陶磁美術館の間の路地を入ったところに小さな祠があり、中に石塔が二つ並んでいる。今は全く忘れ去られたような存在であるが、これは「カラトサン」といい、明治の中頃までは「カラトサン」祭りといって祭事が行われていたようである。

当時、地区内の軒数は六十軒ほどあり、毎年十軒ずつが輪番で酒食を整えて三日に亘り祭事が行われていたとのことである。夜は男性中心の酒宴であったが、昼に参詣するのは子供を連れた母親に限り、それぞれの家ごとに幼児を背負ってお参りするのを煩わしとしていたらしい。家に幼い子がいなかった場合でも十二～三歳までの子供であったら負ぶってお参りし、その光景は滑稽であったという。また、子供がいない家庭でもよその子供を借りてお参りに行かなければならなかった。

この起源は源為朝の黒髪山大蛇退治の伝説に由来する。

為朝が大蛇を退治するため、今の赤絵町付近に陣を構え、石の上に甲冑を置き休憩していたその時、今の稗古場方面から幼児を連れた一人の女性が川を渡って来て、その前を通り過ぎようとしたが、あまりに物々しい軍勢に

子供が恐ろしさのあまり泣き叫んだ。母親は子供を連れて引き返そうとしたが、これを見つけた為朝がその親子を呼び戻させて、子供を抱き上げなだめたという。

このことから、子育て、子供守護、子供の健やかな成長祈願といった意味合いでお祭りがなされ、母子のお参りがされていたと思われる。但し、祭りが行われていた時季については定かではない。

赤丸部分が当時のカラトサン

伝承によれば、為朝が陣を構え休憩したといわれた場所は、明治の中頃まで広い敷地があり、中に「鎮西八郎為朝の碑」があり赤松の大木があったと言われている。そして、「唐櫃祭（からひつまつり）」として、かなり盛大に執り行われていたが、周りが住宅地になるにつれて、敷地もだんだんと狭くなり最後は僅かばかりになった。

「唐櫃」とは、足の付いた大型の櫃で、衣服や図書、甲冑などを入れたもののことで、為朝が甲冑を置いたところから唐櫃石（からひついし）と名付けられたようである。唐櫃は「からびつ」「かろうど」「かろうず」「からうと」「からと」などとも読まれ、現在でも全国の何ヵ所かに、いずれも「唐櫃」と書いて「からと」と読まれる地名が残っている。
※（三重、兵庫、香川県など）

現在のカラトサン

さて、唐櫃石であるが、人々から次第に割ったり削り取られていったとのこと。（向かって左の石塔）

地域の人々を大蛇から救った源為朝の武勇と遺徳を偲び、祭りが行われていたようであるが、今はそれを詳しく知る人もいなくなったようだ。

【参考文献】
「西松浦郡誌」大正十年・西松浦郡役所
「史蹟傳説黒髪山大蛇退治及武雄神社黒髪神社流鏑馬由来」大正十五年・浦郷博義著

失われていく口承地名

大串和夫

平成二十三年、安政六年松浦郡有田郷図を基に地域（五・六区）の河川や水路・道路・旧跡などを確認する事業（一五〇年前の有田皿山ば歩こう隊）があり参加した。この時調査した中で、口承地名があり一部絵図にも記載されていたが、そのほとんどが今は使われなくなっていて、また知っている人も少なくなりつつある。主なものについて列記してみた。（安政六年松浦郡有田郷図参照）

外尾山地区

①バンノウイデ（江戸期　外尾山？小溜池）
②サブヤマ（三郎山墓地　六地蔵あり）
③ビョウソダニ（廟祖谷墓地　溜池　窯跡あり）
④フネノコウ（江戸期　外尾山？畑地）
⑤ドンベンヒキ（道面引溜池あり）

丸尾地区・赤坂地区

⑥チョウベイイデ（丸尾川岸・長兵衛井手？）
⑦ヤケノヤマノタニ（やけ山の谷　赤坂）
⑧スノタニヤマ（丸尾川の巣の谷橋として残存）
⑨ヤゲンジダニ（やげん志谷　中野弥源次）

本町地区（原宿・江戸期外尾山）

⑩アカマツイデ（赤松井手　名は字名から）

これらはその一部であるが、町内には失われていく口承地名がたくさんあると思う。

私は、以前役場に勤務し、昭和四十四年外尾山地区の国土調査（地籍調査事業）をしていた時、当時の地区役員の古老から聞いたことを思い出し、歩こう隊事業の記録として資料館に口承地名を提出したが、各地で口承地名が急速に消えているので、今のうちに文字には残らない俗称の地名を拾い上げないと、その土地の歴史と成り立ちが解らなくなるのではと危惧している。

また、小字（こあざ）については、地形・植物・人物・歴史に関わる小字が多く、次回調査したい。

ブランド名について

馬場正明

旧田代家西洋館の来館者から、展示台の印を見て「田紋」とは何ですか？と尋ねられた。西洋館の施主、田代助作の父親の田代紋左衛門の苗字・名前のそれぞれの頭二文字からなる「ブランド名」と答えた。

日本のブランド名としては、豊田喜一郎の「トヨタ」、本田宗一郎の「ホンダ」ように創業者の苗字を使ったり、茨城県日立市の「日立」からの日立製作所、名古屋市中村区則武の「則武」からの「ノリタケカンパニー」のように創業の地名が用いられるが、有田ではブランド名に苗字・氏名の頭二文字を用いた例が見られる。タウンページや各々企業のホームページを基にそのブランド名の由来を調べた。

●池時製陶所の「池時」は昭和初期に創業した「池田時次」に由来する。
●梶謙製磁の「梶謙」は明治時代に大物作りで有名な梶原友太郎の二男の「梶原謙一郎」が創業、創業者名に因む。
●梶貞製陶所の「梶貞」は明治の初期には黒牟田で窯焼きをしていた梶原八百吉を継いで大正時代初めに再興した「梶原貞一」に由来する。
●金善製陶所の「金善」は兄弟で始めた窯より戦後に南原に独立築窯した「金ケ江善治」に由来する。
●古千製陶所の「古千」は窯元になる前の昭和初期赤絵屋を創業した「古田千代次」に由来する。
●田清窯の「田清」は昭和三十年に創業した「田中清美」に由来する。
●徳幸窯の「徳幸」は大正時代に徳幸製陶所を創業した「徳永幸一」に由来する。
●久光製陶所の「久光」は昭和初期に創業した「久間光次」に由来する。
●藤巻製陶の「藤巻」は明治時代に開催された勧業博覧会で入賞するなどの功績を残した「藤本巻助」に由来する。
●ヤマトクは明治時代に窯焼きの事業を拡大発展させた「山口徳一」の「山徳」に由来する。
●やま平窯元は戦後間もなくに「山平窯」を創業した「山本平作」に由来する。

このように、明治初年にはそれまでの統制が解かれ生産及び取引が自由化され、又「平民苗字必称義務令」が発令された以降の例である。ただ、明治以前でも七、八代の酒井田柿右衛門の時代は「酒柿」のブランド名が使われている。

なお、原重製陶所の「原重」、福丈窯の「福丈」、川武陶器の「川武」、篠英陶磁器の「篠英」、山忠の「山忠」はそれぞれ苗字・名前の頭二文字によると思われるが、由来者が不明で今後ボチボチ調べようと思う。ご存じの方が居られたら是非ご教授下さい。

目からウロコ

吉永　登

「初源伊万里」という名称を初めて目にしたのは、二、三年前、佐賀新聞に連載された村上伸之氏の「有田・陶片物語」であった。村上氏も有田の古陶磁などには無いもので、「とんと思い当るものがない」としながらも今までの発掘調査の成果では、初期伊万里の磁器の中で下級品として製作されたものであることが判明していると述べている。

この用語は、もともと井伏鱒二の小説「珍品堂主人」のモデルになった秦秀雄という古美術研究家が提起したものらしい。

南川良にある小物成窯跡

骨董・古美術の専門雑誌「目の眼」に〝初源伊万里〟について特集記事が掲載されていることを知り、早速読んでみた。驚いたことには、初源伊万里は南川良の小物成や天神森の窯跡で発見されたという事を知り、俄然興味が湧いてきた。小物成も天神森も、県の文化財保護委員として大串和夫さんと二人で十年以上も前から定期的にパトロールで巡回していた窯跡だったからである。

「目と眼」の特集号では古美術研究家の勝見充男氏（自在屋主人）が特別な関心を抱き、破片が発掘された窯跡を熱心に探索されて、古唐津と初期伊万里の変換期の物として紹介されている。

また、東京出身の作陶家・山本亮平氏は、出土した小盃に魅せられて、小物成窯跡の近くに移り住んで工房を設け、近世陶磁器研究では取り上げられることのなかった幻の〝初源伊万里〟の再現を目指して、ご夫婦で制作に励んでおられるとのこと、近々工房を訪ねてみたいと思っている。

「目と眼」平成29年3月1日発行

ホームページ更新しました！

有田史談会のホームページをしばらくぶりに更新しました。昨年から自粛が続き、ホームページの新着情報は史談会通信だけが並んでいて、少々寂しい気がしますが、今月中旬は会報七月増刊号を発行するので新着情報の一番上に載ることになります。ホームページはもっと情報満載で活用できれば良いのですが、情報不足で活動出来てない現状が浮き彫りになっており、そろそろ閉鎖しても良いのかも？と思うこの頃です。

ホームページは年間にサーバーへ契約更新に一三〇〇円ほど支払っております。　利用料金は安く、更新作業は事務局で全てを行うので、これ以上の負担もありません。　しかし、会員が利用しないホームページでは絵に描いた餅と同じです。情報を皆で共有しながら、活用したいと願っていますので、情報をお持ちの方は提供をお願い致します。

インターネット利用が当たり前になった現在でも、史談会会員の年齢は高く、活用どころかホームページの存在すら知らない方もあり不安です。史談会のホームページを一度も見たことがない！そんな方は事務局まで是非ともお越し下さい。これまでの活動の記録をご自身で確認下さい。（笑）

中村貞光 様

平素よりロリポップ！をご利用いただき、誠にありがとうございます。
自動更新設定により、以下の内容にてサーバー契約の更新が完了いたしました。

==========
■お名前：中村貞光 様
■アカウント：arita-sidankai
■ドメイン：sub.jp

■契約期間：12ヶ月
■契約開始日：2017/03/13
■契約終了日：2018/03/12
■お支払い額：￥1,296
■お支払い方法：クレジットカード

さて、吉永　登さんが今回の投稿に引用された「目と眼」三月号を調査資料のページに掲載いたしました。関心のある方は是非ご一読下さい。

新刊の紹介と思い出

大串和夫

『陶磁考古学入門』は二〇二一年三月二十日に発行された初めての陶磁器の考古学書です。

著者は平成元年度から平成二十五年度まで有田町歴史民俗資料館で文化財調査（発掘調査）をされた野上建紀氏で、野上氏と私は平成三年から十七年まで、うち九年間ともに資料館で仕事をしてきました。彼は発掘調査専門で、たびたび大学の依頼により外国へも派遣され、この書籍は有田に在任中の集大成です、

考古学の立場から有田周辺の陶磁器の成立から外国との関わりなど、解りやすく詳細に書かれており、身近な陶磁器の入門書です。関心のある方は、是非購入され調査に役立てて欲しいと思います。

発行　勁草書房
定価　三二〇〇円
著者　野上建紀
長崎大学多文化社会学部教授

編集後記

今回はコロナ禍の中で自主活動の証として、日頃の研鑽の成果をご披露頂こうと増刊号の発行を急遽断行致しましたが、思いが多くの方々に伝わり、ご賛同頂いたおかげで前回の会報を超えるページ数で仕上げることとなり嬉しい限りです。

年に一度の会報作成の作業は年末から早々に着手しますが、事務局として楽しい時間です。毎回投稿の内容に合う写真や挿絵を選ぶ作業も時間が掛かりますが楽しみながら行っています。

会報全体のレイアウトは毎回単調で味気ないかも知れませんが、ページに余白が生じ過ぎないよう収める作業は大変苦労します。全員の原稿をまずしっかり掲載して、最後に私の原稿を載せて、その後に編集後記のスペースを調整して仕上げています。前回の会報ではスペースが足りなくなり、自分の原稿を新たに書き換えるはめになりました。（笑）